

2022/3/27

2022年度日本農業経済学会・ミニワークショップ

# 「研究者の現在と将来－大学での育成と 社会での仕事を考える－」

## 解題

新山陽子(立命館大学)

# 開催趣旨

## ■直面している問題の深刻さ

- 研究者を養成する大学：大学院進学者、特に博士課程が少なく、研究職志望者は僅か
  - 採用先となる研究機関：研究機関など 安定的な採用が困難
  - 学術団体：会員数が長期的に減少傾向
- 

### **豊富で質の高い学術研究を行える研究者の役割：**

学術の発展のみならず、社会課題の解決や社会発展の基礎として不可欠

### **学術的知見にもとづく広い視野、分析的活動能力を持つ職業人の役割：**

社会課題の解決や社会発展の基礎として不可欠

→ 社会発展の基礎を欠く状態になりつつある

→ このような能力をもつ研究者・社会人を養成することは、大学、学会にとって重要な課題

## ■ワークショップの目的

### 研究者育成の現状と課題（修士・博士）：大学

- 大学院進学・研究・就職状況、なぜ大学院進学が少ないのか、どこに課題があるか、今後何が必要かについて、報告を受ける

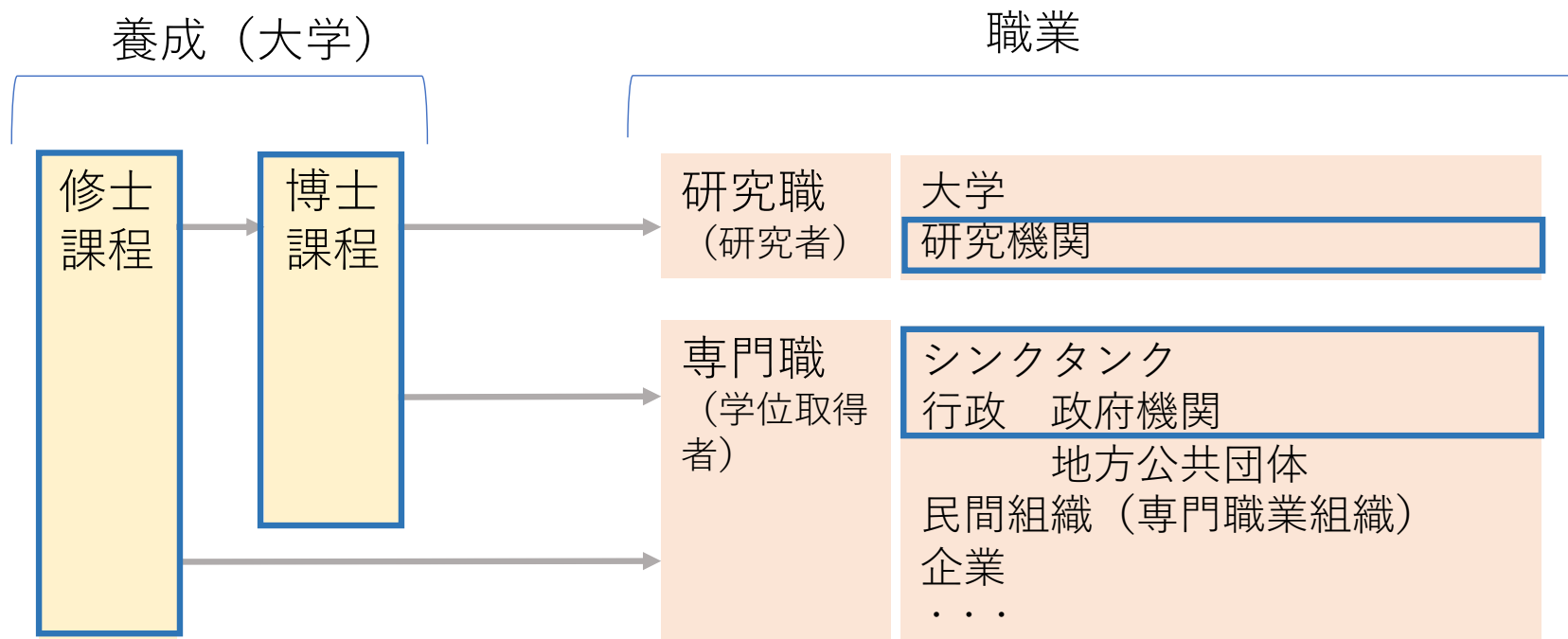
### 採用の現状、採用後の仕事と課題：シンクタンク、省庁、研究機関

- 大学院卒の採用状態、どのような資質・能力を求めているか/ 大学院時代にどのような能力を磨けると良いか、採用側のキャリアパスの課題、今後何が必要かについて、報告を受ける
- 専門性をもった仕事の役割が増している省庁からも、報告を受ける
- ✓ 大学からも、採用状態、研究の状態、研究環境についての報告が必要であるが、今後の課題に

- 以上をもとに、研究者の育成と研究者（修士・博士学位取得者）の仕事の現在と将来について議論し、今後のあり方について多角的に検討する
- 今回を出発点として、引き続き、議論や取り組みを進め、状況を改善できるようにする

## ■ 問題の所在

- キャリアパス：
  - 大学の若手研究者のポスト不足、研究者としての進路が見えにくい
  - 博士号取得者の大学以外のキャリアパスが見えない
- 育成：研究の面白さを感じさせる大学の研究室運営になっていないのではないか
- 高校までの教育、社会風潮により、若い人たちが議論する、掘り下げて考えることをしなくなっている（研究志向の希薄化にもつながる）



## ● 日本では、社会において人文社会系の修士号、博士号取得者への評価が低い

..... 社会的な活動が制約されている

- 例えば、国家公務員に学位取得者が極めて少ない。海外では多く、例えば食品安全分野の国際会議参加者はほぼPhD。
- 日本の2年で移動する専門性を欠く人事システムも大きな問題か。
- 仏では専門職業組織にも、修士号はもとより博士号を持つものを雇用。専門的な見地で政策や活動。

## ● 政策側と研究側の議論の機会がない

- 研究側は社会問題を深く掘り下げ、それについて研究を進め、貢献することを考えなくなっている
  - 政策側は、経験的な範囲でしか政策を考えられなくなっている
- その結果、社会の本質的な進歩を考えられなくなっている
- 双方向議論の上で問題解決を考えられると、双方の仕事は面白いものになる
- 農経学会では学会改革の一環として双方向議論に踏み出したはずだが
  - 仏では、自治体やそのアソシエーションが研究・調査分析活動を元に自ら施策立案を行っており、大学に委託されたり、修士課程の院生が加わることが少なくない。専門性を持つものの役割が大きい。

## 報告の構成とディスカッション

### ■報告（約50分）

#### 1. 研究者育成側からの問題提示

大学院進学・研究・就職状況、なぜ大学院進学が少ないのか、どこに課題があるか、今後何が必要かについて、それぞれ発言をいただく

近藤 巧（北海道大学）

中嶋康博（東京大学）

足立芳宏（京都大学）

#### 2. 研究者採用側からの問題提示

大学院卒の採用状態、どのような資質・能力を求めているか/大学院時代にどのような能力を磨けると良いか、採用側のキャリアパスの課題、今後何が必要かについて、それぞれ発言をいただく

内田多喜生・小田志保（農林中金総合研究所）

日隈崇秀・松原拓也（三菱UFJリサーチ & コンサルティング）

杉中 淳（農林水産省）

高橋克也（農林水産政策研究所）

### ■ディスカッション（約20分）